

雛祭り

池松 孝子

雛人形は中国で厄除けの守り雛としてまつられるものだった。日本でも、人形に霊が降臨するという考えは伝承された。当時の乳幼児の死亡率を考えると、厄除けをし、それを流し雛としてお祓いするのは理解できる。女の子の身代わりとして娘を守ったのだ。

古くは紙や粘土で作った手づくりの粗末な人形に、生年月日を書き、それに汚れを移し川に流した。現在でも、鳥取、島根、岡山県などで「流し雛」は行われているようだ。

流し雛見えなくなって子の手を取る

能村 登四郎

江戸時代になって人形作りの技術も進み、雛人形はどんどん豪華になっていく。さらに宮中の平安装束を再現したものや、内裏雛も流行するようになった。前後して人形作りの名人も現れた。こうなると、かつてのように川や海に流すことは出来なくなった。この流し雛の伝統が、現在の節句の行事が終わると早く人形を片づけなければということにつながったのではないかと思う。

福岡の柳川に「さげもん」という吊るし雛がある。友人の実家で見たのは、七段の豪華なお雛様の両脇に、天井から何十本もの吊るし雛が下げられているものだった。小さな人形や毬、おもちゃなどがぎやかに吊るされていた。

柳川のひな祭りに飾る「さげもん」は、江戸時代の末期からだという。そのころ、雛人形は一般の家庭では手の出ないものだった。そこで女の子の生まれた家に初節句のお祝いとして、親戚が布の端切れを集めて小物を作ったのだという。生まれてきた女の子の幸せを祈りながら、ゆかりの女性たちが一針、一針思いを込めて作ったことが偲ばれて懐かしい気持ちになった。

いつか、伊豆の温泉宿に遊んだ時のことである。それほど広くない旅館のホールに見事な吊るし雛が飾られていた。女将の話によると、静岡は昔から木工細工が盛んな土地柄で、今でも伝統的な手工芸品が残っていることに由来することだった。

厄除けをし、邪気を払うという本来の意味を心に留めておきたい。